

川越図書館

コラボレーション展示企画  
「郊外都市のコミュニティ施設を設計する」

川越図書館では、「川越キャンパスにおける特色ある取組みとのコラボレーション展示企画」を通して、教員や学生の教育研究活動の取組みや成果の紹介・発表をしています。

建築学科の専門科目「建築設計製図」で製作された作品の中から、優秀作品に選ばれた建築模型とともに、関連する図書館の所蔵資料を1~2月に展示しました。



学生が製作した建築模型

川越図書館

コラボレーション展示企画  
「身近な自然 こもれびの森を整備せよ  
—里山の森に戻す取り組みの紹介—」

100年前は里山だった川越キャンパス「こもれびの森」も林野庁の交付金を受け、教職員・学生・近隣住民等で結成された「こもれびの森・里山支援隊」によって再整備の取組みを始めています。里山保全の必要性や意義、身近な森で行われている活動内容について、図書館所蔵資料やパネルを用いて8~11月に紹介しました。



こもれびの森・里山支援隊

板倉図書館

伝統と先進の技から未来を創造する

各キャンパスの図書館に設置されているアクティブ・ラーニング・エリアは、利用者が話しながら利用できるため、グループワーク・ディスカッション等に利用でき、従来の図書館の概念を超えた対話型学修を可能にするスペースです。

板倉図書館では、このエリアを用いて表題のテーマで文化・芸能のイベントを実施しました。

4月	「落語」三代目桂やまと
6月	「GOSPEL」EYES
10月	「アコースティック・ライブ」yaszen
12月	「GOSPEL」EYES+学生サークル



アコースティック・ライブ

板倉図書館

ライブラリー・カフェ トークイベント

知的好奇心が行動力の源であることや、自ら考えて行動することの重要性、コミュニケーションから生まれる研究や学修への「気づき」が新たな発想につながるなどを学ぶ企画として、各界で活躍する企業トップの方々を招いてお話をうかがいました。

5月	「想像力が生み出す力」 ミラクルソリューション社長 長岡路恵氏
7月	「好奇心とイノベーション」 やおきん社長 角谷昌彦氏
10月	「食と健康」もうやんカレー社長 辻智太郎氏
11月	「挑戦することから始まる」 ハラダ製茶社長 原田宗一郎氏



想像力が生み出す力

# KOZEMOS



Part.1

## 図書館員がお薦めする本

『古本屋ツアー・イン・ジャパン 全国古書店めぐり  
珍奇で愉快な150のお店』  
小山力也 著 原書房 2013年(白山図書館所蔵)

本書はひとりの古本好きがひたすら全国の古本屋を訪ね歩き、それを記録したブログを書籍化したものである。著者はもともと音楽バンドおかかえのウェブデザイナーであり、バンドのツアーに帯同して全国をまわった際に古本屋めぐりをしていたとのことで、そこからブログのタイトルがこのように名付けられた。つまり著者にとって古本屋めぐりとその記録を残すことは誰かから依頼された仕事ではなく、ツアー帯同もしていない現在はまったくの自由意志で、かつ自腹で各地に出向いているのである。著者曰く「最初は確かに趣味のひとつのようなものだった」「しかしそれは、いつの間にか己の人生と激しく混ざり合い、その人生を食い尽くし始めていた」とのこと、その熱意は尽きることを知らない。

「古ツアさん」と本名を公表するまでは呼ばれていたこと著者の小山氏は、古本を売っている場所であればどこにでも赴く覚悟で全国をまわり、その店の立地、外観、品揃え、商品の並び方、価格のつけ方、店主の対応、そしてその日の収穫(購入した本)について克明に記録していく。あくまで一般の客として訪れ、店内の写真などは撮らず、内部をくまなく観察し(時には天井を這う鳥のことまで)、本を買い、そして店を出る。記録はすべて店を出た直後に書き記すのだそうだ。これを、ほとんど毎日の頻度で7年以上続けているのである。

と説明すると、著者はなにやらマニアックで近寄りたいたいオーラを醸し出す人物かと思われそうだ。しかし本書をお読みいただければわかるとおり、膨大な知識と行動力とはうらはらに、その文章から醸

し出される人物像はとて小市民的で(褒めています)、ウィットに富み、なにやらかわいらしいのである。古書店の訪問記なのに、思わずくすくす笑いながら読み進んでしまう。古本好きに彼のファンが多いのも、その愛嬌のある文章のなせるわざであろう。本書には彼の描いた店内見取り図や、出会えたなかでも特に「どひゃっほう(喜びの叫び)」な本の書影も載っていて(『八つ墓村』角川文庫初版の強烈さは一見に値する)、そんなところからも彼のユーモラスな人柄がにじみ出ている。

つい著者自身のおもしろさばかり書いてしまったが、本書は副題に「珍奇で愉快な150のお店」とあるように、本当にこんな店が実在するのか?と笑いながら首をひねってしまうような不可思議な古本屋があとからあとから登場する。もちろん見た目はふつうの古本屋も多いのだが、看板に「古書」「古本」の文字がない、そもそも看板がない、そもそも書店ではない、そもそも店舗ですらない(路上だったり通路の壁に本棚があるだけだったり)、ひとりの客の対応に2時間以上かかる、古書といっしょに電子部品が売られている、等々、等々…。書籍化にあたって精選したせいもあるだろうが、本書は古書店めぐりの醍醐味である「一冊の本にめぐり会う喜び」もさることながら、「愉快なお店にめぐり会うオモシロおかしさ」に満ち満ちている。店内は撮影しない古ツアさんだが、店の外観は必ず写真を撮って掲載しており、ページをめくるたびに「こ、これは…」と唸られることもしばしば。

なお、本書が好評を博したおかげか、一昨年には王道を極めんとする『古本屋ツアー・イン・神保町』を、そして昨年は本書の続巻となる『古本屋ツアー・イン・ジャパン それから』と『古本屋ツアー・イン・首都圏沿線』を上梓している。ブログも絶賛更新中。古ツアさんの旅はまだまだ続いている。

『生きがいについて』(神谷美恵子コレクション)  
神谷美恵子 著 みすず書房  
2004年(白山図書館所蔵)

昭和の精神科医に神谷美恵子(1914-1979)という人がいた。彼女は『生きがいについて』を執筆し、1966年にみすず書房から刊行された。2016年で出版から半世紀になる。新刊本が出版されない日はないのであろう現代において、あえてこの本をお薦めしたい。

けれども大学生にとって勉強や就活のほうが大切であり、重要ではなさそう、しかも半世紀前も古い本と開いただけで当然優先順位は低くなるだろう。それに、未来とは限りなく広がるものであって前途有望と感じられるいま、「生きがい」といわれても先の話ではないかと思われるだろう。

だが「生きるために生活する」と「生きていると実感する」と、それぞれの説明とその違いは何かと問われたら、明確に答えられるだろうか。

この本は、著者がハンセン病療養施設で精神科医として働きながら行った医学的な調査から、患者のうちにひそんだ人間の本质を見つめることで生まれた。目に見える形になりにくい「生きがい」を明らかにするために、患者への調査と交流から導き出し紡ぎだされた言葉、著者の経験、古今東西の哲学者・作家・芸術家等の言葉を多数引用して浮かび上がらせようとしている。

本書では「生きがいをうばい去るもの」を次のように説明する。

「ひとはそれぞれ生涯のなかで、ちがった時期に、ちがった形で、人生の行く手にたちふさがるこの壁のようなものにつきあたり、その威力を思い知る。その時には必ず生きがいということが問題になるであろう」

私たちは日常を当たり前のごとく過ごしているが、それが崩れる日は来てほしくないし、来るとしたらいつなのかを知らない。ただの怖いもの知らずでなければ、未来への期待と広がり大きいほど、そこに隠れる漠然とした不安もまた感じると思う。その不安は何か、はっきりとした答えを出すのは難しい。それらを無視することもせずに、豊かな希望に満たされる歩みの先に、本書がよい示唆をあたえることになるだろう。

『モットイナイで地球は緑になる』ワンガリ・マータイ 著  
福岡伸一 訳 木楽舎 2005年(板倉図書館所蔵)  
『わたしが明日殺されたら』フォージア・クーフィ 著  
福田素子 訳 徳間書店 2011年(白山図書館所蔵)

司書として働いているとわずかな時間でも利用者との交流がある。その中で今も覚えているのが「私は有名じゃないし、歴史なんか関係ないから、伝記なんて読んでも意味ない」という利用者の一言である。

この利用者にとって「有名」とは「一般的に」著名な人物を指すのかもしれない。だがそれを「大学」や「地域」に置き換えれば結果はおの

ずと変わるだろう。

次に「歴史」だが、意識しようがしまいが私たちはある地域に住んでいる。その地域は社会の一部であり、積み重ねられた歴史や文化・習俗がある。逆にそれらと何の関わりもなく生きるほうが難しいのではないか。

そして「伝記」は、『大辞泉』によると「個人の生涯にわたる行動や業績を叙述したもの」とある。

私はここで伝記ではなく自叙伝として『モットイナイで地球は緑になる』、『わたしが明日殺されたら』の2冊をお薦めしたい。前者は2004年ノーベル平和賞を受賞し、日本語「もったいない」を世界に広めたことで知られるケニア環境保護運動家ワンガリ・マータイ(1940-2011)の活動の経緯紹介であり、後者はアフガニスタン次期大統領候補と言われているフォージア・クーフィ(1975)が政治家になるまでの手記である。

ワンガリ・マータイは環境問題と貧困・教育・女性の地位向上問題を、グリーンベルト運動によって解決の糸口を見出した。一方フォージア・クーフィは女性が軽く扱われる家父長制にありながら教育を受け、夢見た人生をイスラム原理主義者によって壊されたがゆえに、女性人権問題に取り組む政治家になった。双方とも無名有名の協力者による支えと助けがなければ活動は困難だったろう。

仮に上記の図書を読み、二人の取り組み問題の延長線上に私たちもいるという思いで何か行動を起こせば——問題への理解を深めるための読書も行動に含めるなら——自らも協力者となりうるし、その思いや行動は本当に「意味ない」のか。少しでも違うとを感じるなら、行動してはどうだろう。

『世界一ポエマ・ナイヴネ』チェスワフ・ミウォシュ 著  
つかだみちこ、石原朶 訳 港の人  
2015年(白山図書館所蔵)

チェスワフ・ミウォシュ(Czesław Miłosz)というポーランドの詩人をご存知だろうか。

1911年にリトアニアで生まれて2004年にポーランドのクラクフで亡くなるまでの複雑な生涯は、沼野充義の「歴史と証言—チェスワフ・ミウォシュの生涯と詩についての覚書」(『現代史手帳』54巻11号)と、お薦めする『世界一ポエマ・ナイヴネ』の解説に詳しく書かれているので、ぜひ一読してほしい。

この『世界一ポエマ・ナイヴネ』は1943年ワルシャワにて地下出版された詩集である。1943年のワルシャワは絶滅収容所に移送されるユダヤ人がナチスに蜂起した年でもある。この蜂起は失敗に終り、大勢のユダヤ人がナチスによって殺害された。

この詩集は子供の目線から眺めた世界を描いていて、戦争など知らぬ平和な世界で書かれたような錯覚を覚える。現実には混迷を深め、いつ果てるとも知れない殺戮が繰り返されたのに、その片鱗す

ら感じさせない。

だが現実逃避やノスタルジーにかられたのではなく、ミウォシュは心の内にある、子供のようにまっすぐで純粋な声に真摯に耳を傾けたのではないか。私たちは年を重ねるにつれて現実への対応に重きを置き、内なる声は聞かぬふりをすることがあるが、もし現実に起きた世界が、内なる声に耳を傾けないがゆえに作り出されたとしたら…。それに応えるようにミウォシュはこの詩集を発表したのではないか。

私たちが生きているこの時代はさまざまな問題が同時多発的に起きていて、実際の生活に影響は少ないと思うことがあったとしても、解決の糸口を見出すのは困難だと多くの方が感じているだろう。だからこそ、この詩集が出版された当時とは異なる色彩をはなつて、この時代に読まれる意味を持つのだと思う。

『五十鈴川の鴨』竹西寛子 著  
岩波現代文庫 2014年(朝霞図書館所蔵)

NHKラジオで土曜日の朝8時5分から放送している番組に、「ラジオ文芸館」がある。日本の短編小説をアナウンサーが一人で朗読する番組だが、普通の朗読番組と違うのは、アナウンサー自らが演出も担当してセリフに感情を込めて読み上げ、BGM・効果音もついているのでラジオドラマ風になっている点だ。

テレビと違いラジオは聴き手の想像力が介在する余地のあるメディアで、読書好きにはきっと波長があうと思う。

40分の番組で取り上げられる作品は、戦前から最近のものまで多岐に渡るが、この竹西寛子の作品集に収められている「くじ」も番組で取り上げられた一編である。

老年期にさしかかり、それぞれ連れ合いを亡くしたとある男女が、たまたま住宅展示場での抽選会に出かけた際に隣り合わせて、短い時間交流をもつという話だが、特に情熱的な展開があるわけではない。人生の中の一瞬の出会いを、二人の節度ある態度を中心に淡々と描写していて、実際にあってもまったくおかしくない話である。そこで交わされる会話、互いに気をつかう様子など、人生の老境を迎えた男女の心情を素朴にとらえており、放送を聴いたあと、原作も読みたくなり手に取った。

「五十鈴川の鴨」に収録されている作品は、全て同様に市井の人々の日常のひとコマを切り取ったものだが、その静謐な文体が人の心の機微を巧みに表現していて、読み終えた後とても静かな気持ちになった。

作者の竹西寛子は、古典評論を主に執筆している作家で、自身の被爆体験が執筆活動の根底にあるようである。しかし、「夏空の下で廃虚は明るく、深いやさしさがありました。言いやさくない静けささえも。それが何の明るさなのかはわからないけど、あの廃虚のなかにあったものを、私は今も聴きとろうとしています。原爆の悲惨さだけを感じる自

分だったら、私の仕事はとてつづきません」と述べている。この感性が、作品にもやさしさ、静けさを与えているのだと納得した。

『さがしもの』角田光代 著 新潮文庫  
2008年(白山図書館所蔵)

私がこの本をはじめて読んだのは大学3年生の頃でした。

まず私自身のことをお話しします。日本文学を専攻しまして、平安時代の日記から江戸、近代まで一通りの文学に触れていましたが、授業の他に読む本は現代作家の書いたものばかりで、ときどき周りの人たちの話についていけないこともありました。

3年生から始まるゼミでは比較文学という名のところを選びました。テーマに沿って小説を読み解く形式で、テーマに合っていれば自分で自由に本を選んでよかったので私にはピッタリのゼミだったかと思います。

ただ、やはりゼミの仲間同士でも私の読んだことが無い本の話が出てくることがあって、「そうだよー」と相槌をうちつつも、話をそれ以上に広げられないことに対して内心とても焦っていたかと思います。

ある時大きな書店の文庫コーナーをふらふら歩いていると、目に留まったタイトルがこの『さがしもの』でした。本との出会いをテーマに9つの短篇と著者のあとがきエッセイで構成されている小さな文庫で、タイトルの『さがしもの』は短篇の1つです。文庫カバー裏の解説より、初めて売った本と思わぬ再会を果たす「旅する本」、持ち主不明の詩集に挟まれた別れの言葉「手紙」など。本との出会いの形が様々に描かれています。

私にとって『さがしもの』は特別な本のひとつです。そう思えたのは著者のあとがきを読んだ後でした。

著者のエッセイには、小説家になるまでの過程で本をどのように読んできたかが綴られているのですが、私が悩んでいた当時と似ている状況がありました。そして著者の中で見つけた答えが、「知識のために本を読むようなことをしなくていい。(中略)私を呼ぶ本を一冊ずつ読んでいったほうがいい」でした。

この本も偶然見つけたのですが、そういう感覚でいいのだと思わせてくれたことに今でも感謝しています。

本棚に耳を傾けながらお気に入りの本を見つけるのも楽しいですよ。

『すべて真夜中の恋人たち』川上未映子 著  
講談社文庫 2014年(川越図書館所蔵)

何かを決断し選択し、それによって手放すことになったり、日常にはいくつもの変化に満ちています。今ここにいる自分もこれまで色々な局面で選択してきた結果なのだ、と気付かされます。

主人公・冬子は、ひとりであることを好み、あまり社交的ではない控えめな女性です。フリーの校閲者であり、聖という女性から仕事をまわし

でもらい、自宅にこもってひとりで淡々と仕事をこなす日々を送っています。学校や社会の中で、人付き合いが苦手な自分の世界感を持って生きている人というのは、時にまわりから浮いてしまう存在なのかも知れません。物語の終盤、聖から「あなたをみると、イライラするのよ」と衝撃的なひとことを言われてしまうのも納得できる、そんな女性です。

そんな冬子は恋愛をきっかけに、これまでの自分の生き方に疑問を持ち始めます。

「私は自分の意思で何かを選んで、それを実現させたことがあったらどうか。何もなかった。だからわたしはいまこうして、ひとりで、ここにいるのだ」

「失敗するのがこわくて、傷つくのがこわくて、私は何も選んでこなかったし、何もしてこなかったのだ」

恋愛のアドバイスをしてもらっていた聖にも、冷たい言葉で突き放されてしまいます。物語は特別大きな事件があるわけではありません。恋愛をきっかけに一人の女性が自己を見つめ直して一歩踏み出す成長の物語です。登場人物の言葉に共感したり、時に凶星をさされて気まずさを感じたり、そのひとつひとつの言葉を丁寧にひろって読んだ後には、少しだけ心が温かくなります。行き詰っている人に、現状を変えようと思っている人にお薦めの一冊です。

『アイスタ임 鈴木貴人と日光アイスバックスの1500日』  
伊東武彦 著 講談社 2013年(白山図書館所蔵)

これは、日本アイスホッケー界のスーパースター鈴木貴人とプロとは名ばかりの存続すら危うい弱小チームが、アジアの頂点を目指した年月を描いたスポーツノンフィクションである。

この物語に登場する選手たちは、テレビや新聞で連日目にする華々しいスターたちばかりではない。アイスホッケーは日本ではマイナースポーツだ。ましてや、主人公の鈴木チーム「日光アイスバックス」は給与の遅配すら起こってしまう経営危機に直面したチーム。チームに所属する20代、30代の青年たちは、自分の将来・進路についてそれぞれ悩み葛藤し、苦しみ、それでも氷の上で戦い続ける。

自分の将来、未来に抱く夢と現実の間に立って悩んだとき、この本を読んで欲しい。その悩みは、自分ひとりが抱いているものではないと勇気づけられるはずだ。

ちなみに、鈴木チームの母校は東洋大学。彼も4年間、東洋大学で悩み、戦い、成長し自分の目指す道を定めた。この本を読み終わった後、きつといつものキャンパスが、大学生活が、違った景色に見えるはず。

物語のクライマックス、弱小チームはアジア王者の地位を目前にするが、試合の点数は0-3の劣勢。彼らの夢は叶うのか?そして、37歳の鈴木チームの身体はついに悲鳴を上げ、彼に残されたアイスタime(選手が氷の上で戦う時間)は終わりを告げようとする。

物語のラスト、鈴木の下した決断に必ずや驚くことを約束する。

『絶望名人カフカの人生論』フランツ・カフカ 著  
頭木弘樹 訳 飛鳥新社 2011年(板倉図書館所蔵)

落ち込んだとき、自分を信じられなくなったとき、「頑張れ」という励ましの言葉は思うほど心に届かず、酒の席で出る友人の「実はこんなことがあって」という、つらい身の上話のほうが、活力源になることがあります。「傷ついているのは自分だけではない」と思うことで、自分の荷物はまだまだ軽かったと気づかされ、慰められるのだと思います。

ですが、気持ちを切り替えたいとき、タイミング悪く不幸な友人がいない場合も存在します。そんなとき、静かに寄り添ってくれるのは、やはり、本をおいて他ありません。

そのなかでも私が特にお薦めするのは『絶望名人カフカの人生論』という哲学書(?)です。

「将来に向かって歩くことは、ぼくにはできません。将来に向かってつまずくこと、これはできます。いちばんうまくできるのは、倒れたままでいることです。」

「ぼくはひとりで部屋にいななければならない。床の上に寝ていればベッドから落ちる事がないのと同じように、ひとりでいれば何事も起こらない。」

自分のふがいなさ、恋人からの否定、親への不信。全編にわたって自己否定が繰り返されていきます。しかし、その言葉は嫌味が無く、愛嬌があり、どこかコミカルで突き抜けていて、思わず頬が緩んでしまうのです。

孤独や不安を見つめた作家、カフカの絶望は、とても優しく、温かいです。気持ちが沈んでしまったときは、この本を開いてみてください。

『バムとケロのにちようび』島田ゆか 作・絵  
文溪堂 1994年(朝霞図書館所蔵)

心のやさしい犬のバムと自由気ままなかわいいかえるのケロちゃんシリーズの1冊目の絵本です。

まず目に入るのが色鮮やかなイラスト。キャラクターはもちろん、家具やインテリアにも細かいこだわりが見られます。読めば読むほど新しい発見があるので、子どもはもちろん大人も楽しめる絵本です。

例えば、この話に出てくるおじいちゃんの本が2冊目の『バムとケロのそらのたび』にも出てきたり、3冊目の『バムとケロのさむいふゆ』であるひるのかいちゃんが破いてしまったケロちゃんのチョッキの布を4冊目の『バムとケロのおかいもの』で買いに行ったり、その買い物中のケロちゃんの背中を見るとチョッキには繕ったあとが…などとストーリーがつながっています。

他にも、部屋の絵画や小物などの風景にも細かいしかけがあったり、隅っこにいるキャラクターを見つけてその行動をなぞっていく楽しみもあります。

同じ作者が描いた『かばんうりのガラゴ』『うちにかえったガラゴ』もこのシリーズとリンクしているので一緒に読むと楽しさも倍増です。2011年に5冊目の『バムとケロのもりのこや』が出版されたのですが、6冊目はいつになるのかと心待ちにしています。

『小袖日記』柴田よしき 著 文春文庫  
2010(白山図書館所蔵)

お薦めする本は、源氏物語を題材にした歴史SFミステリーです。

主人公の現代に住むOLが雷に打たれ、平安時代の人間と意識が入れ替わってしまうところから物語は始まります。入れ替わった人物はなんと「源氏物語」の作者紫式部に仕える女官でした。主人公はこうして紫式部の執筆を手伝いながら「源氏物語」を完成させるためにあっちこちと奔走することになります。

現代人が主人公ということで、平安の文化や人間に対して受け入れられないような描写が出てくるのでなんだか親しみやすいところがあります。それに歴史SFミステリーと聞くに難しいうような印象を持ちますが、この「小袖日記」は難しくなく、するする読んでいくことができます。小説をあまり読まない!という方、歴史系が苦手!という方、また源氏物語を知らない!という方もみんなが楽しめる作品だと思います(私は源氏物語という光源氏の趣味がぶっ飛んでるということぐらいしか知りませんでした)。

知らない人でももちろん楽しめるのですが、事前に「源氏物語」を予習しておくことより何倍もこの作品の中に入り込めると思います。

『ランチのアッコちゃん』柚木麻子 著  
双葉社双葉文庫 2015年(白山図書館所蔵)

タイトルからイメージすると、某アニメのパロディ?とも受け止められない本書ですが、内容は全く違います。

まず、タイトルにもなっているアッコちゃん=黒川敦子(部長→ケータリング業へ)がまず濃い。一般的なお局様といわれるタイプとはまた違う、でも迫力満点の女性。

そのアッコちゃんの対比ともいうべき派遣社員の澤田美智子。彼女はどこにでもいる仕事に悩み、恋愛に悩む二十代の女性です。

本書は4編の短編からなっており、メインでないにしろこの二人が係わるような形で話は進んでいきます。

毎日の当たり前の悩みや、先が見えない不安、誰もが持っている悩み。『アッコちゃん』は、それを解決してくれるわけではありません。ただ、色々なものの見方やその人自身が気付いていないその人の良さを気付かせてくれるのです(もちろんストレートには教えてくれませんが…)。

この作家さんは食べ物を絡めた本を何冊か出版しており、本書でも

美味しそうなのが登場し、読者の胃袋を刺激します。

少し悩んでいる時や、鬱屈としている時気分を変える一冊としていかがでしょう。

『百年の家』J.パトリック・ルイス 著  
ロベルト・インノチエンティ 絵 長田弘 訳  
講談社 2013年(白山図書館所蔵)

一軒の古い家が自分史を語るお話です。絵本ということもあり、絵がとても繊細で美しく描かれています。そのため、とても見応えがあります。読むだけで無く、インテリアとしても楽しめる一冊です。表紙が古くなってしまっても味の出る本だと思います。

このお話の中では、人間に心があるように家にも心があります。家が、暮らしている住人をいつも見守っています。結婚、お葬式、戦争と幸せな時も悲しい時も。人間の平凡な日常が描かれているだけに、なぜだか心に響く一冊です。

はじめは、石と木だけだった家に窓ができ、ひしきができ、修理を繰り返し、歴史と時を刻んだ家。古くなった家はどうなってしまうのか。最後の1ページを開くまで結末はわからない。子どもから大人まで見て読んで楽しめる絵本だと思います。

新品の素敵さは違った歴史あるものの素晴らしさを感じるができます。また、家族や家の大切さも改めて感じられるのではないのでしょうか。

『石川くん』柗野浩一 著  
集英社文庫 2007年(白山図書館所蔵)

石川啄木を、独自の視点で解釈した一冊。

今までの研究書と異なる視点で書かれているので、啄木のイメージが180度変わります。書いてある文章も、啄木が友人であるかのように書かれているので、割とすんなりと読めてしまいます。また、啄木に対してかなりツッコミを入れているので、爆笑すること間違いなし。ここまで、こきおろしていいのか?と思うほど、ツッコんでしまいました。

短歌の解釈も独特で、衝撃の現代語訳がついています。こういう解釈もあるのかと目からウロコが落ちることうけあいです。教科書に載っていた存在とは、違う感覚で書かれています(いかにダメ人間なのか強調されているような…)。「アレ??ホントはこんな人間だったの?」と思うこと必見です。

石川啄木の入門書としては手に取りやすいので、これを機に短歌の内容を知ってみるのにはオススメです。中に載っているイラストも可愛いので、より読みやすい本となっています。



『明日の子供たち』有川浩 著  
幻冬舎 2014年(白山図書館所蔵)

児童養護施設を舞台にしたお話です。知識もないまま、ドキュメンタリー番組を見て「新人」として働きた主人公ですが、色々最初は空回り。話が進んでいくと、既成概念にとらわれずに発言をしていくため、ベテランの職員では思いつかなかった発想をしていることがわかります。

高校を卒業すると退所しなければならぬ子供たちですが、その退所後の課題を浮き彫りにしている点で他の児童養護施設の話とは異なるリアルさがあります。

ランドセルを寄付する話が出てきますが、それが如何に寄付している人の思い込みであるかも描かれていて、読んでみると、どのような支援が必要か考えさせられる小説となっています。児童の虐待やネグレクト等で、保護される子供たちが社会から「見られている」状況や偏見、子供たちの思いも知ることができ、是非色々な方に読んでもらいたいと思いました。巻末の参考資料も役に立つので、合わせて読んでみては如何でしょう？

『本屋さんのダイアナ』柚木麻子 著  
新潮社 2014年(白山図書館所蔵)

この本に出会ったのは、書店さんで大々的に取り上げられていたのをみつけ、表紙が可愛いのもそうですが、ダイアナという名前が世界一ラッキーな子になって欲しいから「大穴」という名をつけられたという衝撃から、この本が気に入り読み始めました。この本は、ダイアナと彩子、対照的で互いに憧れを持つ、2人の少女の成長ストーリーです。生まれや育ちなどさまざまな場面で悩み、壁にぶつかる少女たちが自分自身の弱さに気がつき、ありのままの現実を受け入れる物語。心に沁みる言葉がたくさんあり、共感できる部分が多いです。のめり込んでしまう魅力があります。

そして、本を通じて知り合い、救われていくふたり。作中にたくさんのお本が出てくることや、2人が本を好きなことなど、改めて本を読むことの大切さ、楽しさを実感できます。切なかったり苦しかったりしますが、少女たちの成長する姿をみて勇気もらえる物語です。

『子供の名前が危ない』牧野恭仁雄 著  
KKベストセラーズベスト新書  
2012年(白山図書館所蔵)

本の内容は、現在子どもに“キラキラネーム”を付ける親が何故増えているのかを追いかけ、結論として現代社会が作り出した人々の無個性や無力感がこうした名前を生み出しているという著者の考えが語られています。

図書館には、伊東ひとみ「キラキラネームの大研究」(2015)という本がいられていますが、こちらの本はキラキラネームの増える原因を日本の言葉の難しさや名前の曖昧さ、漢籍の素養が失われつつあること等、歴史的な視点からアプローチしています。それに対し、「子どもの名前が危ない」は社会の構造や人々の心理的な側面に注目して研究を進めていて、比較して読むと非常に面白いと感じました。

「子どもの名前が危ない」では研究の際にグラフを用いたり、著者の経験を語ったりと読み進めやすく、また新書であるという点も持ち歩きに便利で学生向けだと思います。

『和菓子のアン』坂木司 著  
光文社文庫 2012年(白山図書館所蔵)

「赤毛のアン」のようなタイトルと表紙のおいしそうなお菓子の写真に惹かれて、最初、手に取りました。

ちょっぴりためでなぜか親近感のわく!? 梅本杏子(通称アンちゃん)がデバ地下の和菓子店「みつ屋」で働き始めるところから物語は始まります。

デバ地下のおいしそうなお菓子の匂いにわくわくする感じや、デバ地下の裏側もちょっと垣間見えたり、常に季節を感じることで、色とりどりの和菓子の奥深い魅力満載で、それだけでもとても幸せな気分になるけれど、個性豊かな店長や同僚たちに囲まれた「アンちゃん」が職場で経験する、和菓子を買ってくるお客様と、買って行った和菓子に由来するちょっとした事件を通して成長していく感じも微笑ましく、ミステリーの要素が加わった「謎解き」はとても楽しかったです。

読むと和菓子屋さんに行きたくなるような、ほっこりミステリーです。

『凍りのくじら』辻村深月 著  
講談社文庫 2008年(白山図書館所蔵)

文庫サイズでやや分厚目ですが、読んでみるとその世界観に圧倒されあつという間に読み終えてしまいます。

冒頭は、写真家である主人公が雑誌のインタビューを受けている場面から始まります。その後、主人公が写真家になるきっかけを思い出さず形で、物語が展開されます。

『凍りのくじら』には頭の弱い友人や不思議な先輩、可哀想な元彼など色々な意味で衝撃的な人間が多数登場しますが、誰もが「いるいるこういう人!」と思ってしまうようなリアルな個性と魅力に満ち溢れています。誰でも気軽に読める内容なので、是非お勧めです。



貴重書デジタルコレクションを  
ホームページで正式公開

附属図書館には、重要文化財「狭衣」をはじめ、さまざまな貴重書があります。ただし、資料保存の問題から一般に閲覧公開する機会は限られています。

そこで、これらの資料について順次ホームページでの公開を始めました。

古写本・絵巻物・浮世絵・戯作・ちりめん本・洋書など、普段目にする事のない貴重書を画像付きで解説しています。

また、原書の特別展示など附属図書館の貴重資料に係る情報を随時発信していきます。



http://www.toyo.ac.jp/site/collection1/

白山図書館

特別展示「ストラスブール・イヤー  
～フランス留学・研修への誘い～」

2015年、東洋大学はフランスのストラスブール大学との協定締結30周年を迎えました。記念行事のひとつとして白山図書館では、ストラスブールの魅力を紹介した所蔵資料の特別展示を9～10月に行いました。

写真パネルなどを中心に本学との交流の歴史を紹介するとともに、所在地のアルザス地方の観光案内、お菓子やワインなどの伝統料理、「星の王子様」で有名なサン＝テグジュペリらゆかりの人々を取り上げた資料を展示し、あわせて留学の資料なども配布しました。



ストラスブール  
展示

白山図書館 朝霞図書館

特別貴重書展・特別企画展

貴重書等を直接観ていただく機会として、白山では11月に「旅に出よう ～むかしむかしの旅から現代の旅ものがたり」をテーマに浮世絵などを125ホールで展示しました。

朝霞では、7月に特別企画展「ムーミン谷に行こう! in 朝霞図書館 ～欧米の名作絵本にふれる一週間」とミニ講義「ムーミン谷に夏が来る ～名作挿絵本の世界」を同時開催、11月にはライフデザイン学部開設10周年を記念して貴重書展「妖怪 ～不気味で、可愛い、妖怪たちが現れる」を開催しました。



朝霞図書館「妖怪」展

朝霞図書館

特別講演会

絵本作家としても活躍されているイラストレーター、および元子ども兵の社会復帰支援などを行なっている国際ボランティア団体創設者をお招きして、特別講演会を開催しました。

7月	「絵本から生まれるもの」 イラストレーター 川端理絵 氏
11月	「こうして僕は世界を変えるための一歩を踏み出した」 NPO法人テラルネッサンス理事・創設者 鬼丸昌也 氏



絵本から生まれるもの